

## 書評

小林 昇著『重商主義の經濟理論』

一九五二年（二八九頁、東洋經濟新報社）

木村 元 一

本書は小林教授の第三の著書である。本書の『重商主義を貨幣的經濟理論として把へよう』（序文三頁）といふ意圖が、どのような意味をもつか、この點を知るためには、第一の著書『フリードリッヒ・リストの生産力論』（一九四八年）、第二の著書『フリードリッヒ・リスト研究』（一九五〇年）その他を省みなければならぬ。わたくしは本書の書評のためにこれらを見参した。もとより教授の研究過程を詳しくあとづけることはその場所ではないが、注意すべき第一點は、右の諸著からも知られるやうに、教授の重商主義研究が、主としてリスト研究から次第に築きあげられてきてゐるといふことであらう。

重商主義はフリードリッヒ・リストによれば、アダム・スミ

ス等古典派から誤まつて『重商主義』と呼ばれてゐるが、その核心は『工業主義』（Industriesystem）にほかならない。リストのかゝる重商主義觀は、はたして正當であらうか、これを學說史的に、また社會經濟史的に追究することが小林教授の問題となつたのである。教授の研究は昭和一七年、商學論叢（一三卷、一、二號）の『重商主義の解釋について』と題する注目すべき論文にまとめられた。その後教授は相次いで論文を發表したが、『リストの生産力論』に收められた論文では、次のやうにのべてゐる。重商主義のうちには相互に反撥し合ふ二つの政策體系、すなはち、第一に主として仲介貿易的な商業資本主義のための商人的重商主義——特に一七世紀以來トリー・フーリー・トレードとして體系化されたる——、第二に國民的工業の貿易上の保護を要求する立場に立ち、主にイギリス毛織物工業を中心とする資本家層の利益を代表する工業的重商主義——マソンに批判されたが、ブリオニズム以來一貫して保護主義を唱へた——、があり、この兩者はそれぞれ前期的な商業資本と、近代的な産業資本との主張として、常に相戦ひつゝ複雑な過程のうち成長したが、しかし『重商主義を規定せられた歴史概念と解する限り、われわれは、工業的重商主義をこそ重商主義としなくてはならないであらう。』と。これが教授の結論でもあり出發點でもあつた。

このテーマは『リストと重商主義』と題する論文で一層廣汎に展開され、トーマス・マンと對立關係にあつたチャールズ・

キングの『ブリティッシュ・マーチャント』の主張を工業保護論の典型的な代表作として分析したのち、教授は、リストの正當性がキングの所論とその歴史條件から證明せられるとしたのである。

小林教授はこのやうに重商主義のいはば政策的核心を工業的重商主義にもとめたが、ついで重商主義のいはば理論的核心を明らかにする仕事をみづからの課題とするにいたつた。もとより重商主義を學說史上の独自の貢獻において再認識しようといふ意圖は、最も初期の論文にも現はれてゐるが、機熟して、いまや四つの力作を収めたこの『重商主義の經濟理論』を世に問はれることになつたのである。

\* 『リストの生産力論』二〇六―八頁、ならびに『リスト研究』一六八―九頁。

## 二

本書の内容をなすものはつぎの四篇の論文である。

第一 重商主義の貨幣理論

第二 ケインズの重商主義論

第三 ジニイムズ・ステュアートの經濟學說

第四 「國富論」と重商主義

以下簡単にその説くところを概観しよう。

第一論文は、上掲『重商主義の解釋について』における理論的考察を展開する。教授はこゝで重商主義の特質が、その理論

の實踐目的に存するといふよりは、むしろその理論構造自体にあると主張し、しかもこの理論構造は古典派に比較して『時としては理論的な優越』をしめすといふ。この優越性は、マルクスの承認するところであり、ハイエク、ケインズも認めるところであるとし、重商主義の立つ前提條件を吟味し、歴史的發生的概念としての重商主義の理論を概括整理して九項目を列挙する。教授によれば、重商主義にあつては、絶えざる貨幣經濟の擴大が伴つたこと、第二に、信用制度が未だ確立せず、第三に國民經濟は開放體制 (Open System) と考へられ、第四に勞働力と諸原料とはその存在が豊富でありその限り遊休資源と考へられてゐたこと、以上の四點が前提條件である。重商主義の理論の概括九項目は、簡単に紹介し得ないのを遺憾とするが、ケインズの視角から理論の再構成が行はれてゐることに注意すべきであらう。

しかしながら教授の問題は主題に即して『貨幣理論』に限られる。しかば重商主義の貨幣理論はいかなる構造を有つものとされるか。教授によれば、モネタール・ジステムとしての重商主義の理論的核心は連續的影響説にある。換言すれば、古典派の主張するとき機械的數量説に對する修正と批判の先取といふ點にその核心が存するといふ。ロック、ヒューム、ステュアート、ヤングの四人が取り上げられ、貨幣の増加がもつ生産刺戟作用への認識、有效需要への洞察、貨幣量の自動的調節作用に對する不信などが擧證せられる。

第二論文はケインズの重商主義論を考察せんとするものであるが、教授は豫め、重商主義における雇用の問題が、ケインズにおけるそれと『本質的に異なるものを有してゐた』ことを指摘する。換言すれば、例へばベテニーにおける雇用の問題は『労働に對する労働者の意欲と能力とを維持しようとする目的』(七一頁)をもつが、ケインズは大きい蓄積にもとづく『成熟せる經濟』における雇用の問題にする。しかしそれにもかゝらず重商主義期にも『不況と停滞とがかなり明白に混在してゐた』(七二頁)と考へステュアートのうちに不況對策の理論が用意されてゐることを指摘する。ケインズが『埋れた過去の良識としての重商主義の本質に鋭い照明を與へた』ことに共鳴し、ほぼケインズに従つて(1)順なる貿易の重要性の認識、(2)資本の限界効率と利子との區別、(3)利子率決定の正しい認識、(4)有效需要の理論が重商主義のうちに横はることを論定する。

第三論文は本書の半ば近くをしめる長篇の力作で、『重商主義の理論體系』といふ副題をもつてゐる。ジェイムズ・ステュアートは重商主義の合理的表現者である。ケインズの視點からこの偉大な、しかし埋もれた政治經濟學の樹立者の老大な著書を理論的に解明すると同時に、マルクスの指摘した點、すなはち『資本の形成過程』ならびに『都市と田舎との分離』に對する鋭い歴史的な洞察を、新たに評價しなほさうといふのが、この論文の野心的な試みである。この第三論文『ジェイムズ・ス

テュアートの經濟學說』は序説においてこれまでの學說史家のステュアートに對する評價を概観した後、前篇においてA『方法』とB『人口・雇用・有效需要』とC『近代的生産力の生成』を論じ、後篇において、D『仕事と需要の均衡』・『富の均衡』とE『貿易の差額』・『労働の差額』とF『成熟せる經濟』を考察してゐる。

ステュアートは偉大な方法家でもあつた。彼は、經驗的觀察を重視した。彼の命名になる政治經濟學はその目標を『社會の各人に食料と必需品と雇用とを用意すること』におく。小林教授のステュアート『原理』の分析をこゝに紹介することはできないが、極めて綿密である。綿密な検討ののち教授はいかなる結論に達してゐるか、教授をして語らしめよう。いはく、

『われわれは、最も簡潔にステュアートの理論の骨子と性格とを要約することができる。——すなはち、ステュアートは經濟の根本的動力である人口の問題が近代社會においては雇用の問題であることを捉へ、雇用の確保するためには有效需要が確保されねばならぬことを理解した。さうして、成熟せる國民經濟にあつては、この有效需要は爲政家の指導の下に、第一には奢侈的消費によつて、第二には廣汎な政府支出によつて支へられなければならないとしたのである。「仕事と需要のバランス」といふ言葉は、したがつて、この理論のもたらす政策的歸結の集約的表現であつた。さうして右の意味において、ステュアートの體系は「有効需要の經濟學」であり、「過少消費の理論」

であり、信用擴張と財政支出との要請であり、短期均衡のポリテイカル・エコノミーであり、——要するに初期の段階とし避けえなかつた限界と缺陷とを含みながらも、あくまでも一貫したモネタール・ジステームであつたのである』(二一九—二二〇頁)と。他方スミスとの對比においては次のやうに結論する、曰く、『ステュアートは近代生産力と近代社會との歴史的性格について明察してゐたにもかゝらずその現實にたどりつゝある方向には暗く、スミスはこの方向について明敏であつたがゆゑにかへつて歴史的認識の一面に缺陷をしめした』と(二二五頁)。

最後に第四論文をみる。

これはスミス國富論が重商主義の理論としてほとんどもつぱらトマス・マンの所論のみを取り上げた點を顧かんとするものである。教授によれば、スミスは重農派のフランスより遙かに進んだ段階にあつたイギリスの重商主義理論(例へばステュアート)と對決すべきであつた。たしかに彼は重商主義を批判したが、批判には矛盾がある。彼は貨幣即富の觀念・貿易差額の理論、獨占と保護の理論を徹底して批判するが、スミスは一般的貿易差額説(マン)を以て個別的貿易差額説より一步前進して自由貿易に接近せる學説とみとめた、が事實においては、マン、チャイルド、ダザナント、ノース等の自由貿易思想家はいちじるしい富のバランスの思想(自國の利益は他國の損失なりとする思想)の所有者であり、窮極のところ東印度會社の商業

獨占の擁護者にすぎなかつた。これに反し個別的貿易差額説は、富のバランスの虛妄をあげ、スミスのな『生産力』の立場に接近してゐる。教授はスミスが『二つの重商主義の相反する意義について十分明らかでなかつた』(二五二頁)とし、ダニエル・デフォー、ジョウゼフ・ハリス、ジョサイア・タッカー等の所説を再検討し、これらの論者のうちに次第に『生産力を背景とする自由貿易の可能と利益とへの確信』(二六九頁)がつよまり來つたことを指摘する。もとより教授は『二つのシステムを含む廣義の重商主義の理論的基底にとにかくも前期的色彩が密着し、貿易差額説と「富のバランス」の觀念とがまつはつてゐたかぎり』(二五四頁) スミスの正當性を否定するものではないが、スミスの學說史的不用意の結果、マネタール・ジステームの十分な批判的擷取が等閑に附されたことを強調し、次のごとく述べる。

『蓄積と消費・發展と沈滞・自由と統制・長期的均衡と短期的均衡・「純粹」と「政治」・均衡と構造——あるひは時として價格と所得等、相對立する問題領域は、歴史の現實としての近代資本主義がこれらすべてを包含するものであるにもかゝらず、マルクスの獨自の業績を除いては、いはゞ相異なる二つの理論的潮流として、永く「抽象的對立」を解消し得ぬまゝにその後の學說史を織り成し來たのである』(二三三頁、同じく二八九頁)。

すでにのべたやうに、『重商主義の經濟理論』一卷は、獨立に發表された四つの論文から成つてゐるが、それらを通じて一つの問題意識が一貫してゐる。いなこの問題意識は、單にこの四つの論文のみならず、さかのほつて他の二つの著書をもつらぬいて居り、さらに教授の示唆することく、今後の研究をもつらぬいて行くと思はれる。執拗ともいふべき問題意識の一貫は、この種の學說研究にとつてまづ第一の要請であらうから、われわれはこの點からのみ言つても教授の絶えざる努力に敬意を表さざるを得ない。

問題意識の一貫性のゆゑに——敢へてゆゑにといひたい——問題領域は絶えず前進的にしかも幾重にも積みかさなる。この結果一聯の研究はあたかも重疊たる山脈のごとき威容をそなへるに至つてゐる。また著者はその言葉通り『あたふる限り原典(古版本あるひは複製本)に直接する用意』と、『同時に對象の歴史的背景』に對する顧慮とを吝まないものである。

時系列的には一貫せる問題意識の上に立ち、空間的には積み重なる問題領域の一構成要素たる本書に對し、卒然と評價を加へることは許されない。著者と同じ努力と用意のある者にしてはじめて全體を評價しうる。このことは、教授の諸著を讀みすすむうちに次第にはつきりしてきたのである。したがつて以下の評言は、自ら拂らざるものゝ妄評のきらひがないでもない

が、敢へて二三の疑問を提出して示教にあづかりたいと思ふ。

第一の點は、シュモラー↓カニンガム↓ゾムバルトの重商主義觀に關聯してである。教授は重商主義を『初期資本主義(原始蓄積)の理論と政策とである』(四頁、註三)とし、他方において既にみたごとく、『重商主義の特質はその理論の實踐的目的に存するといふよりは、むしろその理論構造自體に存する』(七頁)とする。しかし教授が他の箇所でもいはれるやうに、歴史的現實としての重商主義が理論と政策の兩面をもつことが事實であるとするならば、理論自體と理論の實踐的目標とを優先關係において見るのは當を得ないのではなからうか。さらに『重商主義を國力の體制 System of Power (クシャール)とするシュモラー↓カニンガム↓ゾムバルトの傳統はその主張自體妥當ではない』(八頁註一)とするのは納得し難い。もとよりわれわれは國力なるものを抽象的法律學的に國家權力と規定して甘んずることはできない。國家の形成といふ場合の國家がいかなる内容の國家であるかを不問に附することは許されない。また教授の主題が重商主義をその理論的側面より解明する點におかれてゐる以上、『便宜の問題』として重商主義における政治目標ならびにこれに關する理論を問題のそとにおくことは當然であらう。しかし貨幣理論が富のバランスの理論に表現されるといふ一事を以てしても、シュモラー的な重商主義觀の正當性は證明される。またステュアートにみられるごとく、流通經濟の網の目のなかにレーバーを收容してこれをインダス

トリーとすることが同時に社會・國家形成の理論となつてゐることも、このことを立證するやうに思はれる。

第二の點はしばしば繰りかへされてゐる『モネタール・ジスチームと古典派との抽象的對立』に關聯する。重商主義の理論的核心をその特有なる貨幣理論にもとめることはひとまづ異論なきところであるが、これをハイエックにしたがつて連續的影響説の範疇で處理することに對しては、疑問が生ずる。もとより教授は重商主義的貨幣理論をハイエックの連續的影響説と同一視してゐると思はれない。事實本書に展開されてゐる重商主義的貨幣理論はきはめて限定された特有な理論である。教授自身も『ハイエックのいふ第二の段階としてのいはゆる連續的影響説とこれを含む、層廣泛な貨幣理論的諸認識』(二九頁、傍點わたくし)が重商主義において發展せることを明言する。しかしやはり教授が連續的影響説を以て重商主義の理論的核心とみてゐることは疑ひないのである。ところで他方では、このハイエックの構想と關聯して、マルクスの重商主義「マネタール・ジスチーム論を援用し、あたかも連續的影響説が、マルクスによつて『近代經濟の「特定の」諸領域における完全な市民權』を是認されてゐるかのとき敘述が多くの箇所で見出される。しかしマルクスが特定の諸領域において完全な市民權をみとめてゐるものは、連續的影響説ではなく——これは理論構成上やはり數量説である——、貨幣としての金銀がとる特殊の機能に對する重商主義的見解であつた。さらに「抽象的對立」が、まさに

本稿に引用したやうに『蓄積と消費……純粹と政治……價格と所得』(この書評の七八頁參照)の相對立する問題領域にまで適用されてゐることは不可解である。おそらくこの對立がケインズによつて綜合されたと考へてゐるわけではないと思はれるがいかがなものであらう。

第三の疑問は重商主義とケインズ理論との歴史的地盤の差異に關する。教授がつとめて兩者の差異を強調することは、さきに紹介した通りである。當時の失業の議論が單純かつ底の知れた資本家的プロバガンダにすぎず、今日の末期資本主義期の失業問題と本質に異なることは異論の餘地なきところである。しかしながら本書全體を通じて、重商主義の理論がケインズの平面に投影されすぎてゐるやうに思はれるのである。この疑點は多くの場所に見出されるが、特に第三論文『ステュアートの經濟學說』に即して二、三指摘しておきたい。

教授はステュアート『原理』が『資本の成立過程』を正確に洞察してゐたことを強調し、とくにそのC「近代の生産力の形成」の項で詳しくステュアートを紹介する。しかしながら理論的説明を加へる場合には、ケインズ概念がステュアートをゆがめる。教授はステュアートにおける『有效需要』の原理が、あたかも近代的雇用の原理であるかのごとく説くが、これは教授自らが警告するケインズ(例へばセン)の無條件の重商主義禮讚に後退することになるやうに思はれる。重商主義における『有效需要』の論理も、決してケインズにおけるごとく近

代的な失業者に對するものでなく、あくまで教授のいふ『近代的生産力』の形成のためのものであつたことは、有效需要が同時に職業の分化、レーバーからインダストリーへの起動力として捉へられてゐることによつて明らかである。自己の生活資料の獲得にのみ働くひとびとは、ステュアートにあつては無用の、換言すれば社會外の人間なのである。これを、餘剰を生みだしたレードによつて他に供給し合ふひとびとたらしめるための——これは正に原始蓄積の重要な側面である——原理が、欲望であり、貨幣への欲求であり、同時に有效需要である。

このことはわたくしの理解する限りステュアートのいはゆる『成熟せる經濟』（一九三頁以下）についても安當する。教授は一國が幼稚な交易の状態から外國貿易の段階に入り、最後に第三の國內交易の段階に入ると、ケインズの意味における『成熟』状態が現出し、ステュアートはこゝで外國貿易の杜絶によつて生ずる失業のために、有效需要の作出を考慮すると述べる。しかしステュアートは第三の段階を深刻な問題の發生する段階とみてゐるのではなく、かへつて『まるで輝かしい (So far the most brilliant)』状態とみてゐるのである。たしかにステュアートは製品と需要の均衡の破れることをおそれる。失業者の發生をもおそれる。しかし彼の最もおそれるのは、とくにかゝる成熟段階にあつては、需要と供給の急激なアンバランスである。彼は注意深く需要の increase (激増) と augmentation (漸増) とを區別し、前者を非難する。それゆゑ爲

政者は激増 (その後には激減が来る) を防止し、輸出の杜絶した場合には、富者の奢侈的消費を以てこれを補ふやう課税その他の方策を講ぜよと説くのである。總じて需給いづれの側が優越するにせよ、劣勢な方を引上げて漸次にバランスを恢復させることが爲政者の目標となる。

この場合注意すべきことは、かゝる漸次的な高い水準への引上によつて、『原理』第一巻の人口増加↓食料増加が期待されてゐることである。教授がステュアートにあつても『社會の消費性向の弱まること』が危惧されてゐると説くのは、正しくないやうに思はれる。

第五の疑問はわたくし自身の問題でもある。教授は重商主義を工業主義と規定し、これを支へる獨立生産者の歴史的に必然なる發展過程から、眞の工業主義の樹立者たるアダム・スミス經濟學への接續をはからうとせられる。反面からいへばアダム・スミスとトリー・フリー・トレードとの直接的連繫を否定し、經濟學史的にも經濟史の必然を恢復しようとする。しかしながら、大塚史學にいふ下からの革命が歴史的に一貫したものであるとしても、學說史の上でそれが必然的に擧げられなければならないのであらうか。資本主義または資本主義精神の起源の問題と共に學說研究の際いつもわたくしの腦裏を去らない疑問は、本書の明快な——しかし餘りにも明快な——敘述にもかゝらず、やはりまたはねかへつて來るのである。